

# 近世後期における芦峯寺系立山曼荼羅の制作過程についての一試論

福江 充\*

## はじめに

立山山麓芦峯寺の33宿坊の衆徒は、各々の宿坊ごとに檀那場をもち、毎年秋から翌春にかけての農閑期に全国の檀那場に赴き、立山信仰を布教してまわった。そしてその際、立山曼荼羅を絵解きして民衆を教化していた<sup>1)</sup>。

さて、立山曼荼羅の研究については、制作年代は岩鼻通明氏や筆者等によってある程度明らかにされているが<sup>2)</sup>、制作者・制作地・制作方法等については、それを示唆する史料がきわめて少なく、ほとんど研究されていない。

こうした状況のもと、筆者自身は制作場所についてはともかく、制作方法については、現存の立山曼荼羅そのものの構図や図像にそれを解明する鍵が隠されていると考え、以下、本稿では作品が比較的多く残っている芦峯寺系立山曼荼羅に限定して、それぞれの曼荼羅における構図と図像配置の検討をベースにしながら、その制作過程について若干考察を試みたい。

## 1 芦峯寺系立山曼荼羅の諸本に見られる共通図像

### 1.1 画面の全体的な構図を形成する立山連峰の山容・山並の図像と雲・霞の図像

芦峯寺系立山曼荼羅において、全体的な構図を固めていくうえで大きな役割を果たしているのが、立山連峰の山容やその山中の山並及び山間を漂う雲や霞の図像である。そこで、芦峯寺系立山曼荼羅の諸本の中から全体的に図柄がそっくりなものを選び、こうした構図の基盤となる山容・山並や雲・霞等の描線だけを抽出してみると、第1図に示すように類型化することができた（なお、対象資料の形態を第1表に示す）。

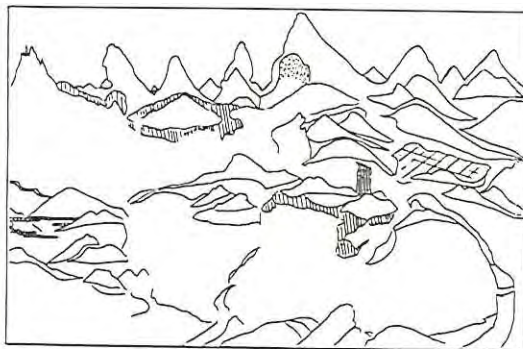
ちなみに、この図に示した曼荼羅諸本の描線図を類別に相互に比較・検討していただきたい。そうすれば、そこに明らかに模写関係が存在していることが納得していただけるであろう。

---

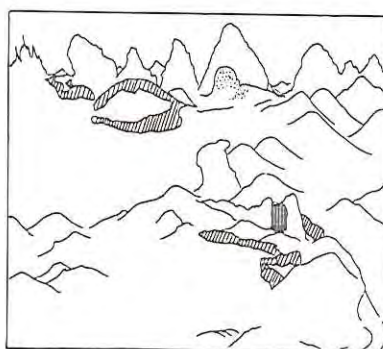
\* 富山県 [立山博物館]



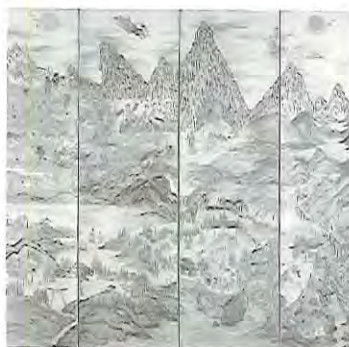
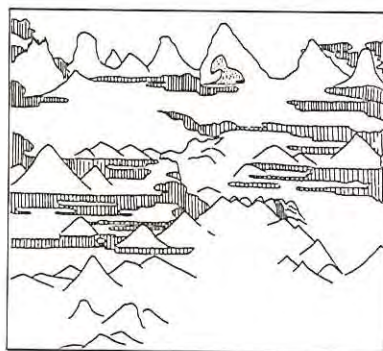
【富山県立図書館本】



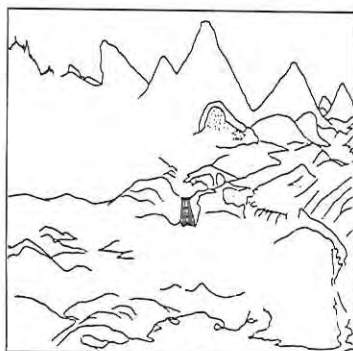
【泉蔵坊本】



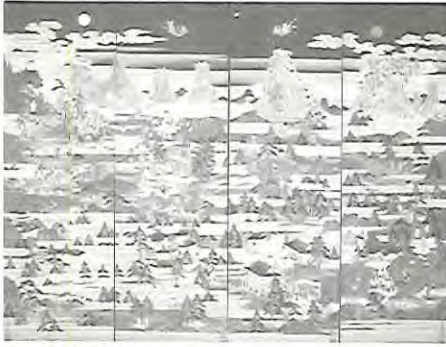
【坂木氏本】



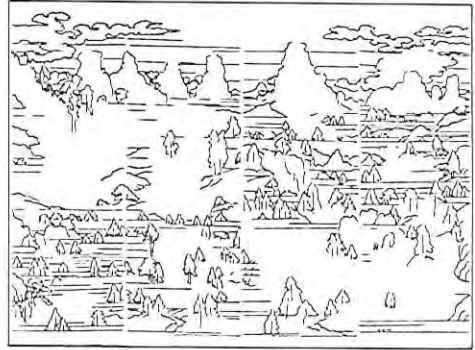
【立山町本】



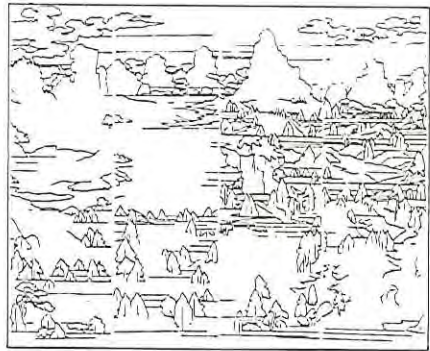
第1図-1 芦峯寺系立山曼荼羅諸本における背景の構図の類型-A類



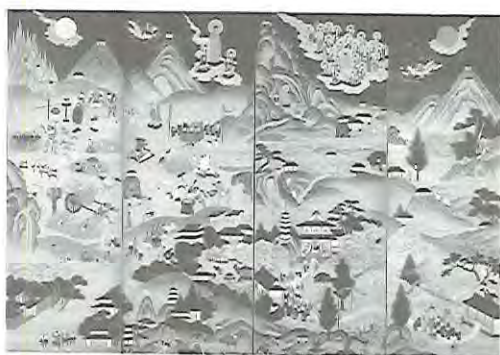
【宝泉坊本】



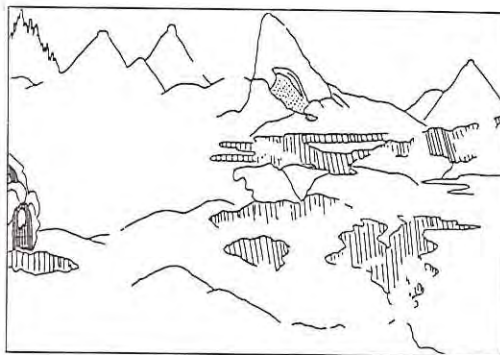
【吉祥坊本】



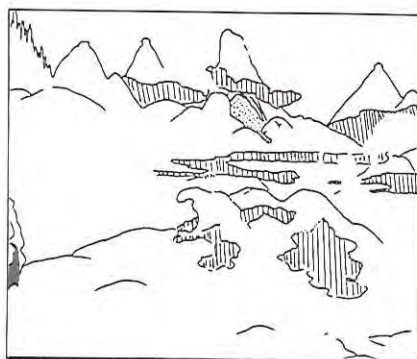
第1図-2 芦峯寺系立山曼荼羅諸本における背景の構図の類型-B類



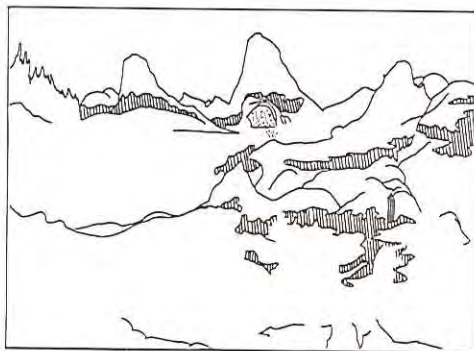
【相真坊B本】



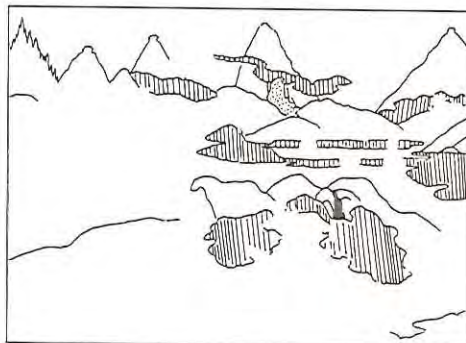
【大仙坊A本】



【筒井氏本】



【善道坊本】



第1図-3 芦峯寺系立山曼荼羅諸本における背景の構図の類型-C類

第1表 共通図像を有する芦峯寺系立山曼荼羅の一覧

分類	資料名称	形態		
		材質	幅数	法量
A類	「富山県立図書館本」*	絹本	4幅	縦133cm × 横153cm
	「泉蔵坊本」	絹本	4幅	縦122cm × 横134cm
	「立山町本」**	紙本	4幅	縦123cm × 横124cm
	「坂木氏本」	紙本	4幅	縦134cm × 横146cm
B類	「宝泉坊本」	絹本	4幅	縦140cm × 横180cm
	「吉祥坊本」	絹本	4幅	縦145cm × 横136cm
C類	「相真坊B本」	紙本	4幅	縦150cm × 横215cm
	「大仙坊A本」	絹本	4幅	縦133cm × 横153cm
	「筒井氏本」	絹本	4幅	縦145cm × 横210cm
	「善道坊本」	紙本	4幅	縦132cm × 横180cm

\* 富山県立図書館蔵。 \*\* 立山町蔵。注のないものはすべて個人蔵。

## 1.2 立山信仰の縁起や説話を具体的に表現する図像

A～C類の立山曼荼羅を見ていると、同一グループ内の曼荼羅相互間で、構図だけではなく同じ図像が共有されていることに気づく。そうした中で最も顕著なものはC類の「相真坊B本」と「大仙坊A本」であり、一見しただけで、それらが共通の構図や図像で成立していることがわかる。

さて、こうした関係を具体的に浮かび上がらせるために、特にC類のグループ内で、それぞれの曼荼羅から内容を構成する図像85カットを選出し、相互に比較検討し、図像の類似度を示す統計表を作成した。その際、色彩については曼荼羅によってかなり異なりが見られるので、今回は形にだけ着目しあえて取り上げなかった。また、なるべく客観性を期すために複数の目で検討した。

その内容は第2表に示したとおりである。図表中、「◎」は全くの同図像、もしくは限りなく同図像にちかいもの、「○」は図像の細部に微妙な異なりはみられるものの、

第2表(その1) 図像比較表

(「大仙坊A本」・「相真坊B本」・「筒井氏本」・「善道坊本」の相互を比較したもの)

比較対象図像	比較対象作品名					
	大仙坊A本			相真坊B本		筒井氏本
	相真坊B本	筒井氏本	善道坊本	筒井氏本	善道坊本	善道坊本
1 布施館(布施城)	×	△	◎	×	×	△
2 布施城下の人物群	◎	○	△	○	△	△
3 岩上にとまる白鷹	◎	◎	◎	◎	◎	◎
4 佐伯有頼が熊に矢を射かけた場面	◎	○	×	○	×	×
5 玉殿の窟の場面	◎	◎	△	◎	△	△
6 閻魔王庁(閻魔王と冥官)	◎	◎	○	◎	○	○
7 浄瑠璃鏡	○	◎	○	○	○	○
8 人頭	◎	△	◎	△	◎	△
9 業秤	◎	○	◎	○	◎	○
10 首枷の亡者	○	○	◎	○	○	◎
11 火の車	◎	○	◎	○	◎	○
12 地獄の大釜	○	△	△	△	△	△
13 亡者を包丁で切り刻む鬼	◎	○	善なし	○	善なし	善なし
14 亡者の舌を引き抜く鬼	◎(反転)	○(反転)	◎	○	◎(反転)	○(反転)
15 亡者に大釘を打つ鬼	◎	○	○	○	○	○
16 鉄鎧地獄	◎	簡なし	◎	簡なし	◎	簡なし
17 衆合地獄(臼と杵)	◎	○	○	○	○	○
18 無間地獄(火炎地獄)	△	△	◎	△	△	△
19 日蓮尊者と申制しの母	◎	△	△	△	△	○
20 石女地獄	◎	○	○	○	○	○
21 両婦地獄	○	○	◎	○	○	○
22 片袖幽霊譚	◎	○	○	○	○	○
23 森尻の智明坊	○	簡なし	○	簡なし	◎	簡なし

凡例：第1表(その4)の末尾を参照。

第2表(その2) 図像比較表  
 (「大仙坊A本」・「相真坊B本」・「筒井氏本」・「善道坊本」の相互を比較したもの)

比較対象図像	比較対象作品名					
	大仙坊A本			相真坊B本		筒井氏本
	相真坊B本	筒井氏本	善道坊本	筒井氏本	善道坊本	善道坊本
24 畜生道 (馬などの動物)	◎	○	◎	○	◎	○
25 修羅道 (刀を交える武士と太鼓を鳴らす鬼)	◎	△	△	△	△	△
26 血の池地獄 (女性の亡者と如意輪観音菩薩)	○	△	○	△	○	△
27 寒地獄	◎	△	○	△	○	△
28 針の山 (追い立てる鬼と逃げる亡者)	○	△	○	△	○	△
29 賽の河原 (地藏菩薩と子供、錫杖の向き)	○	△	◎	◎	○	△
30 施餓鬼法要 (僧侶の人数と左端の卓台)	◎	○	○	○	○	○
31 阿弥陀如来の三尊来迎 (雲型に注意)	◎	◎	◎	◎	◎	◎
32 阿弥陀如来と諸菩薩の来迎 (雲型に注意)	◎	◎	×	◎	×	×
33 飛天	◎	○	◎	○	◎	○
34 日輪・月輪	◎	○	○	○	○	○
35 立山浄土の場面の型	○	△	◎	△	○	△
36 鬼と、鬼に髪を捕まれた人物	◎	簡なし	善なし	簡なし	善なし	善・簡なし
37 藤橋	相なし	×	◎	相なし	相なし	×
38 道元と猿	大・相なし	大なし	大・善なし	相なし	大・善なし	善なし
39 材木坂	○	△	◎	△	○	△
40 美女杉	○	×	○	×	○	×
41 禿杉	○	△	○	△	○	△
42 鏡石	大・相なし	大なし	大なし	相なし	相なし	×
43 罫石	◎	×	×	×	×	×
44 称名滝	△	×	×	×	×	△
45 獅子ヶ鼻岩姿	◎	○	◎	○	◎	○
46 獅子ヶ鼻の鎖場を登る人物	相なし	簡なし	◎	相・簡なし	相なし	簡なし

凡例：第1表(その4)の末尾を参照。

第2表(その3) 図像比較表

(「大仙坊A本」・「相真坊B本」・「筒井氏本」・「善道坊本」の相互を比較したもの)

比較対象図像	比較対象作品名					
	大仙坊A本			相真坊B本		筒井氏本
	相真坊B本	筒井氏本	善道坊本	筒井氏本	善道坊本	善道坊本
47 弘法大師と護摩供養	大・相なし	大・簡なし	大・善なし	相・簡なし	相・善なし	善・簡なし
48 扇の松	◎(反転)	△	△	△	○	△
49 金蔵坊の天狗姿	×	簡なし	×	簡なし	×	簡なし
50 室堂の堂舎	◎	×	◎	×	◎	×
51 刈込地	相なし	×	×	相なし	×	×
52 山 容	○	○	○	○	○	○
53 立山大権現祭(神輿練りの場面)	◎	○	◎	○	◎	○
54 立山大権現祭に参詣の人物群	◎	○	○	○	○	○
55 芦峯寺の諸堂	◎	△	◎	△	◎	△
56 閻魔堂	◎	○	×	○	×	×
57 閻魔堂と冥官	◎	○	○	○	○	○
58 嬬 堂	◎	△	◎	◎	△	△
59 嬬 尊	×	×	◎	◎	×	×
60 布 橋	○	△	◎	△	○	△
61 布橋の四方を囲む杉	○	△	○	△	○	△
62 布橋の四方を囲む四方幡	◎	○	○	○	○	○
63 布橋から転落する人物	大・相なし	大・簡なし	大・善なし	相・簡なし	相・善なし	善・簡なし
64 嬬堂川の大蛇もしくは龍	◎	△	◎	△	◎	△
65 流瀧頂	大・相なし	大・簡なし	大・善なし	相・簡なし	相・善なし	大・相なし
66 引導師側の式衆(全体的な図様)	○	○	◎	◎	○	○
67 来迎師側の式衆(全体的な図様)	○	○	◎	○	○	△
68 幡持(引導師側)	◎	△	◎	△	◎	△
69 幡持(来迎師側)	◎	△	◎	△	○	△

凡例：第1表(その4)の末尾を参照。



第2表(その4) 図像比較表

(「大仙坊A本」・「相真坊B本」・「筒井氏本」・「善道坊本」の相互を比較したもの)

比較対象図像		比較対象作品名					
		大仙坊A本			相真坊B本		筒井氏本
		相真坊B本	筒井氏本	善道坊本	筒井氏本	善道坊本	善道坊本
70	天蓋持(引導師側)	◎	○	◎	○	○	△
71	天蓋持(引導師側)	◎	○	◎	○	○	△
72	警固(2人の警固の位置関係に注目)	△	△	◎	○	△	△
73	布橋灌頂会の儀式に参列する参詣者)	◎	◎	×	◎	×	×
74	布橋灌頂会の行道に参列しない人物(引導師側)	大なし	大なし	大・善なし	○	善なし	善なし
75	布橋灌頂会の行道に参列しない人物(引導師側)	○	○	善なし	○	善なし	善なし
76	任王門	◎	○	△	○	△	△
77	鐘桜堂	大・相なし	大・筒なし	大・善なし	相・筒なし	相・善なし	善・筒なし
78	高札	大・相なし	大・筒なし	大・善なし	相・筒なし	相・善なし	善・筒なし
79	五重塔	○	○	○	○	○	○
80	牛石	◎	筒なし	◎	筒なし	◎	筒なし
81	露天の地藏菩薩坐像	大・相なし	大・筒なし	大・善なし	相・筒なし	相・善なし	善・筒なし
82	石造物(石塔婆など)	大・相なし	大・筒なし	大・善なし	相・筒なし	相・善なし	善・筒なし
83	影向石(柵と石に注目)	◎	筒なし	○	筒なし	○	筒なし
84	衣柳樹・奪衣婆・鬼・亡者	×	×	○	◎	×	×
85	布橋灌頂会の場面の雲型	○	×	◎	×	○	×
比較対象図像 ◎ 合計		◎→45	◎→7	◎→34	◎→11	◎→16	◎→3
比較対象図像 ○ 合計		○→20	○→30	○→22	○→32	○→33	○→23
比較対象図像 △ 合計		△→3	△→22	△→7	△→18	△→9	△→28
比較対象図像 × 合計		×→4	×→9	×→8	×→6	×→11	×→13
比較対象図像 ◎+○ 合計		◎・○→65	◎・○→37	◎・○→56	◎・○→43	◎・○→49	◎・○→26

- 凡例 ◎: 全くの同図像、もしくは同図像にちかいもの。  
 ○: 図像の細部に微妙な異なりはみられるものの、総体的にみて同図像といえるもの。  
 △: 同じモチーフをほぼ同じ形で描いているが、筆致が異なっていたり図像のある部分のみが大きく異なっているもの。  
 ×: 同じモチーフを全く異なる図像で描いているもの。

総体的に見て同図像といえるもの、「△」は同じモチーフをほぼ同じ形で描いているが、筆致が異なっていたり図像のある部分のみが大きく異なっているもの、「×」は同じモチーフを全く異なる図像で描いているものを示している。

以下、その結果について若干ふれておきたい。◎・○の図像までは、ほぼ共通の図像とみなしてよいであろうが、図表の中から各組み合わせの◎・○の数を合計し、図像の共通度の高い組み合わせを順に見ていくと、それが最も高いものは「大仙坊A本」と「相真坊B本」の組み合わせの65である。さらに続けて見ていくと、「大仙坊A本」と「善道坊本」の組み合わせの56、「相真坊B本」と「善道坊本」の組み合わせの49、「相真坊B本」と「筒井氏本」の組み合わせの43、「大仙坊A本」と「筒井氏本」の組み合わせの37である。

## 2 芦峯寺系立山曼荼羅の諸本に見られる模写関係

### 2.1 芦峯寺系立山曼荼羅に見られる模写のパターン

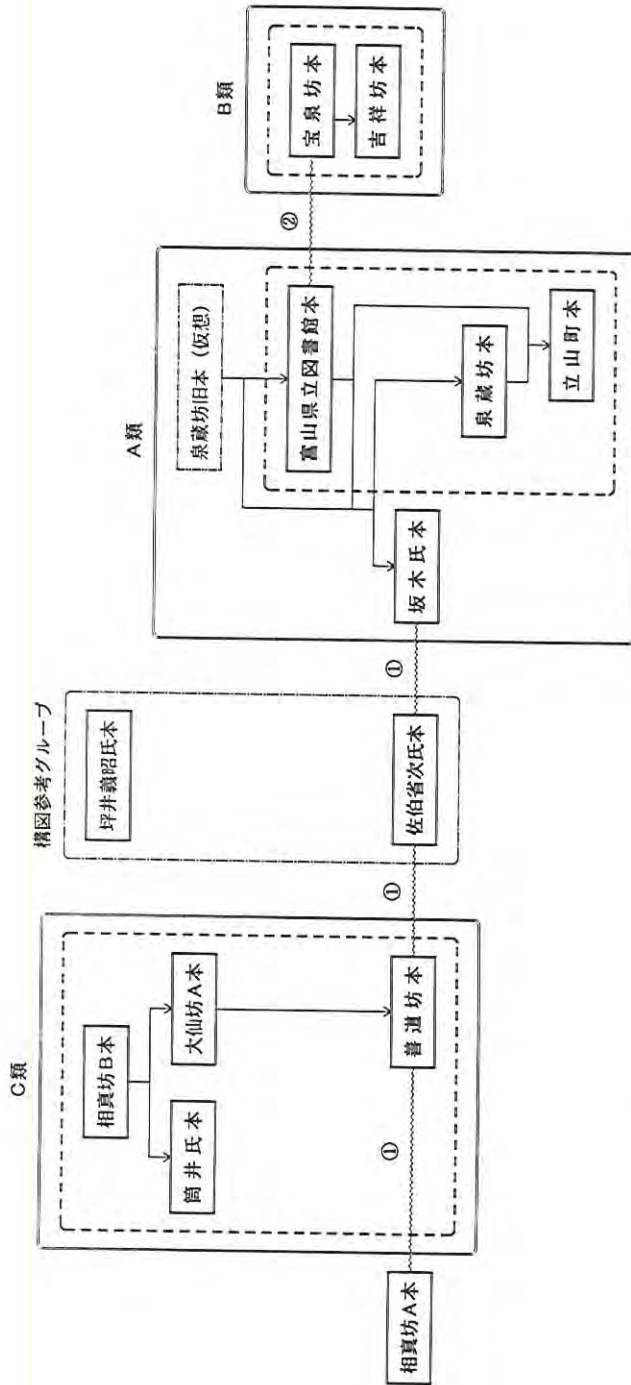
前節の第1図と第2表の内容に強く示されているように、現存の芦峯寺系立山曼荼羅の諸本のうち、半数以上のものに模写関係が窺われる。そして、それらの模写の仕方は、①. [構図を確立させる立山連峰の山容・山並・雲・霞の図像と、立山信仰の縁起・説話を表現する図像の両者ともを、画面の全体にわたって模写する場合。]、②. [構図を確立させる立山連峰の山容・山並・雲・霞の図像だけを模写する場合。]、③. [立山信仰の縁起・説話を表現する図像のある部分だけを模写する場合。]の3種類に大別できる。

さて結論的な分類を示すことになってしまうが、最初に上記の曼荼羅諸本間の模写の仕方による分類と、後に詳しく指摘する曼荼羅諸本の模写系譜を組み合わせ構成した分類図—第2図を提示しておきたい。

前掲の模写パターン①に該当する曼荼羅は、第2図において、二重線と点線の両方に囲まれているものである。模写パターン②に該当する曼荼羅は、第2図において二重線に囲まれたものである。模写パターン③に該当する曼荼羅は、第2図において波線で相互に結ばれたものである。

### 2.2 A類における相互の模写関係

「富山県立図書館本」には、裏書きとして「遠州敷地郡引馬白之南 米津村 磐谷写之」と識語が見られ、在地の絵師磐谷が既存の立山曼荼羅を模写して同本を制作したことが窺われる。



凡例

- の囲みは、全体的な構図を確立している立山連峰の山容・山並と雲・霞の図像に共通性が見られるもの。
- ⋯ の囲みは、立山信仰の縁起や説話を表現する図像について、多くの部分で共通性が見られるもの。
- の囲みは、模写とまではいえないものの、背景の構図がそっくりなもの。
- の線 (矢印) は、曼荼羅相互の模写関係や模写順番を示す。
- ⋯ の横線は、図像の一部にのみ共通性が見られるもの。
- ① 佐伯有頼の装束や容姿が共通しているもの。
- ② 開院堂前の露天の地藏菩薩坐像と石造物2基、牛石の図像だけが共通しているもの。

第2図 近世後期の声跡寺系立山曼荼羅の系譜図

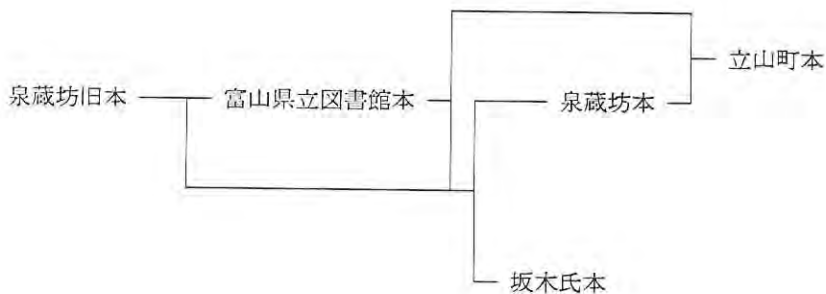
さて、江戸時代に毎年遠州を廻檣配札していたのは芦峯寺泉蔵坊であり、おそらく絵師磐谷は泉蔵坊が使用した立山曼荼羅を模写して「富山県立図書館本」を制作したのであろう。しかし、ここでいう泉蔵坊所蔵の立山曼荼羅は現存の「泉蔵坊本」とは異なると考えられる。確かに背景の山容・山並や雲などの構図、或いは各図像等はほとんど共通しているが、その顔料は新しく明治以後に制作された可能性が高い。

これらの内容を整理して考えると、おそらく「富山県立図書館本」は泉蔵坊本の旧本を模写して制作されたのであろう。「富山県立図書館本」が完成した後、その構図や図像を模写してか、或いは「泉蔵坊旧本」の構図や図像を模写して、現存の「泉蔵坊本」が制作されたと考えたい。

「坂木氏本」については、背景の山容・山並の構図や図像が他のA類のそれと共通しているが、他の部分の図像は廃仏毀釈の影響を著しく受けており、他のA類のものと全く異なっている。

「立山町本」については、その水彩によるカラフルな色彩や、常願寺川の護岸工事の描写等から、昭和期に入ってから制作されたと考えられる。図像の細部が微妙に異なる場合も多いが、特に人物の配置や姿勢等は「富山県立図書館本」や「泉蔵坊本」を模写しないと描くことができないものであり、おそらくこの両作品のうちのどちらかを模写して制作されたと考えられる。

以上を系図に表してみると次のようになる。



第3図 A類における模写系譜図

## 2.3 B類における相互の模写関係

### 2.3.1 大名による立山曼荼羅の奇進

芦峯寺雄山神社蔵の古文書群の中に、芦峯寺が加賀藩寺社奉行所へ宛てた上申書で、

大名から寄進された立山曼荼羅に関するものが見られる。

乍恐書付を以奉申上候

当山ニ其往昔より傳來之御絵図曼荼羅之在可候。

然所、安政五年、三州西尾城主松平和泉守殿

直筆を以被書写表装之義者、

大御所様ニ奉申、先公方様之御召衣ヲ、

右和泉守殿御拝領被成、夫を以被仰表具、当山江

御寄附之御絵図御座候。尤江戸表ニおゐて、

御上様奉始夫々御大名様方御内様被為遊御絵

図ニ御座候。依而、当

御上様奉始夫々様方、為御武運御長久御子孫

御繁栄現当ニ世之安楽、御内様被為成下候様

宣敷奉願上候。以上。

卯九月

立山芦峯寺 在判

寺社御奉行所

前掲の文書は「卯九月」の日付を有するが、その内容から安政5（1858）年以降の「卯年」すなわち慶応3（1867）に記されたことが窺われる。

具体的な内容は次のとおりである。安政5（1858）年に、三河西尾城主の松平和泉守が、昔から芦峯寺につたわる御絵図曼荼羅（立山曼荼羅）を自ら書写し、その表装については、將軍（江戸幕府第15代將軍徳川慶喜）の許可を得て、以前に松平和泉守が先の將軍（江戸幕府第14代將軍徳川家茂）から拝領した御召衣を表具に使用したという。こうしてできあがった立山曼荼羅は芦峯寺に寄付された。もっとも、それ以前に、この立山曼荼羅は江戸城において、將軍をはじめ諸大名やその他関係者の間で鑑賞されており、芦峯寺では、こうしたことを御縁として、將軍をはじめ諸大名やその他関係者のために、武運長久・子孫繁栄・現当二世の安楽を祈念させていただきたいと、書付をもって加賀藩寺社奉行所に願い出たのである。

さて、上記の文書に登場する松平和泉守は本名を松平乗全といい、三河国西尾城主（6万石）である。乗全は大坂城代の役職を勤めた後、弘化2（1845）年2月15日から安政2（1855）年8月4日まで老中職を勤めた。その後、安政5（1858）年6月23日から再び老中職に就き、万延元（1860）年4月28日まで勤めている。江戸・下総を廻樞配

札布教していた芦峯寺宝泉坊とは師檀関係にあり、天保11（1840）年11月には宝泉坊に石垣を寄進・造立している。

また、宝泉坊に所蔵される立山曼荼羅（「宝泉坊本」）には、画中に「源乗全書」の墨書銘や落款が見られ、さらに裏書きに「立山縁起四幅自模写以寄附 越州立山寶泉坊 西尾拾遺源乗全 安政五年戊午十二月」と見られ、同本が松平和泉守の製作によるものであることが窺われるが、前掲の文書に見える立山曼荼羅、すなわち松平和泉守が自ら書写し先の將軍の御召衣を使って表装した後、芦峯寺に寄進したとする立山曼荼羅は、まさに、この「宝泉坊本」を指していると考えられる。

### 2.3.2 「宝泉坊本」と「吉祥坊本」との間に窺われる影響関係

前掲の文書に松平和泉守が描いた立山曼荼羅が（後の「宝泉坊本」）が、江戸城において將軍をはじめ諸大名やその他関係者の中で鑑賞されることが記されているが、そうした際に、後に芦峯寺吉祥坊に立山曼荼羅（「吉祥坊本」）を寄進した、江戸幕府第14代將軍徳川家茂の正室・皇女和宮（法号静寛院）が同座していた可能性を想定させ、非常に興味深い。

「吉祥坊本」の構図や図像は、「宝泉坊本」のそれと、ほとんど共通する。おそらく、「吉祥坊本」は、江戸城で松平和泉守が描いた立山曼荼羅を何らかの機会に鑑賞した和宮が、立山信仰に興味をいだき、当時江戸で布教活動を行っていた吉祥坊へ立山曼荼羅の寄進を思い立ち、慶応2（1866）年に、絵師の登光斎林龍と林豊に「宝泉坊本」の構図や図像を参考にさせて描かせたものであろう。

さて、「吉祥坊本」には50名ほどの施主名が記され、その二段目左端に「三州岡崎城主 本多氏」「為御武運長久御子孫繁栄御城内安全」とある<sup>3)</sup>。

三州岡崎城主本多氏とは、通称本多美濃守、三河国岡崎城主（5万石）本多民忠のことである。彼は、松平和泉守と同様、和泉守が老中職を免ぜられた万延元（1860）年4月28日の2ヶ月後の同（1860）年6月25日から文久2（1862）年3月15日まで、老中職を勤めている。さらに、元治元（1864）年10月13日から再び老中職に就き、慶応元（1865）年12月19日まで勤めている。

吉祥坊の文久3（1863）年以降の元治か慶応頃に記されたと推測される檀那帳から、本多美濃守は吉祥坊と師檀関係を結んでいたことが窺えるが、おそらく彼の老中在職期間中に、和宮が吉祥坊への立山曼荼羅の奉納を発願したのを受け、吉祥坊の檀那であった彼も、施主の一人として実際にその世話をしたのであろう。

ところで、吉祥坊の檀那帳の中に、次の一・二のような興味深い記載がみられる。

- 一、 南傳馬町二丁目天国横町  
一護大守 加賀屋忠七殿  
佛  
慶應二、寅四月立山曼荼羅様御書被下候
  
- 二、 銀座四丁目  
越中屋にて  
一護大守 栄文堂庄之助殿  
佛  
慶應二寅四月御曼荼羅様御書被下候

この檀那帳は芦峯寺雄山神社蔵の古文書群の中に見つかったもので、表紙には「御祈禱檀那帳（欠字）申歳八月吉日」と記されている。檀那帳最末尾には「目印覚」として、檀那に販売した護符の種類や数を略記する際の凡例が載せられており、さらに、その中の「本札」の事例を記した箇所にも本札の文面が記され、「奉修立山秘法供御武運長久如意満足祈所 吉上坊」と見られることから、この檀那帳が吉祥坊のものであることが窺われる。また、檀那帳には慶應2（1866）年の年号・内容が見られるので、それ以後の申年に成立した檀那帳といえる。ちなみに慶應2（1866）年以降の最も早い申年は明治6（1873）年である。

この檀那帳によると、慶應2（1866）年4月に、南傳馬町に住む加賀屋忠七と銀座に住む栄文堂庄之助が「立山曼荼羅様」、或いは「御曼荼羅様」を書いたと記している。これに対して、「吉祥坊本」の画面向かって右下部に「慶應二丙寅年四月吉辰 登光齋林龍謹画」さらに左下部に「林豊」と、この作品の製作年月日や絵師名が記されており、制作時期については完全に一致している。吉祥坊に関する立山曼荼羅が同時期にそう何点も描かれたとは考え難く、おそらく檀那帳に記された立山曼荼羅と「吉祥坊本」は同一のものと考えられる。案外、立山曼荼羅を書いたという加賀屋忠七と栄文堂庄之助は「吉祥坊本」の絵師「登林齋林龍」と「林豊」のそれぞれどちらかであったのではなかろうか。或いは、加賀屋忠七と栄文堂庄之助は立山曼荼羅制作の実質的な担当者で彼らが世話人となって、登林齋林龍と林豊の2人の絵師を雇い、描かせたのであろう。

以上の内容を整理すると、まず和宮が吉祥坊への立山曼荼羅の奉納を発願し、自ら大口スポンサーになるとともに、当時、吉祥坊と師檀関係を結んでいた老中本多美濃守も施主として加わり、曼荼羅の実質的な制作は加賀屋忠七と栄文堂庄之助が請け負ったの

である。

#### 2.4 A類とB類の諸本に共通する図像

A類とB類の芦峯寺系立山曼荼羅は、構図や図像の点で相互の模写関係があまり窺われないが、唯一、閻魔堂前の露天の地藏菩薩坐像とその横の石造物2基、牛石の図像にだけ共通性が感じられる。この図像はA類とB類の立山曼荼羅にしか見られず、おそらく「宝泉坊本」を描いた松平和泉守が参考にした立山曼荼羅はA類のものであったと考えられる。ただ松平和泉守には、おそらく立山曼荼羅に対して絵解きの道具としての意識、すなわちそれを立山信仰の布教に活用しようとする意識はなく、むしろ立山曼荼羅を題材とした芸術作品として描いたであろうから、布教の道具であることを第一義とする他の芦峯寺系立山曼荼羅とは若干趣を異にする全体的に優美な独特の構図や図像が生まれたと考えたい。

### 3 C類における相互の模写関係

C類の曼荼羅に関しては、A類やB類のように制作過程を示唆する古文書史料が全くみられない。それゆえ、以下、曼荼羅そのものの構図と図像配置の比較・検討をベースにしながら、その制作過程にせまりたい。

#### 3.1 芦峯寺系立山曼荼羅諸本の相互の模写関係を調べる際の指針

立山曼荼羅の製作者が、ある曼荼羅を模写して新たな曼荼羅を制作していく際に、全ての部分において完璧な模写が行われた場合もありうるだろうが、製作者の美的感覚や、ストーリーの認識違い、法量から生じる物理的な都合、労力の削減等によって、意識的に図様・図像の細部に微妙な変化が加えられることもあったと考えられる。こうした点に着眼し、各曼荼羅の構図と図像配置を検討し、次に曼荼羅相互の間で同部分を比較し、製作者が行った完全模写・置換・付加・変形・削除等の操作<sup>4)</sup>で生じた微妙な変化の意義を解読することによって、曼荼羅相互の模写系譜等をおおよそ推測することができる。

ところで、特に芦峯寺系立山曼荼羅諸本における相互間の模写関係を探る場合、芦峯寺系立山曼荼羅にしか描かれることのない、芦峯寺の布橋灌頂会や立山大権現祭等の祭礼の図様、或いは立山開山縁起の図様に視点を置くことが効果的と考える。

その理由は、祭礼の場面の構図や図様には、儀式内容はもちろんのこと、当時の人々の有り様やその動きが実に生き生きと現れており、豊富な情報が内在されているからである。さらにそれ以上に重要な理由は、例えば地獄の場面や極楽浄土の場面等の図像については、立山曼荼羅諸本の相互間の影響だけではなく、他の社寺参詣曼荼羅や地獄絵・



極楽浄土図の影響なども考慮されなければならないといった問題が生じるからである。

それゆえ、以下、芦峯寺の最も重要な祭礼で、芦峯寺系立山曼荼羅の画面の中でもとりわけ大きくスペースを割いて描かれる布橋灌頂会の場面を例にとり、その構図や図像・ストーリーがいかにか有機的に機能しているかを分析し、曼荼羅相互の差異の部分から模写関係を探りたい。

### 3.2 模写関係・模写順番を探る際に基点となる曼荼羅について

C類の曼荼羅の佐伯有頼の装束を比較すると、「善道坊本」のそれだけが他のものと異なっている。すなわち、「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「筒井氏本」に見られる佐伯有頼の装束は、甲（当世具足）と一文字笠（奉行・代官等の将士が、出火その他の非常時等に使用した。或いは陣中で雑兵が雑兵具足として兜に代えて使用した。）で表現されており、それに対し「善道坊本」は菱烏帽子・狩衣・袴・脚絆・草鞋で表現されている。ちなみに、「善道坊本」の図像は「佐伯省次氏本」やB類で廃仏毀釈の影響が見られる「坂木氏本」と共通している。

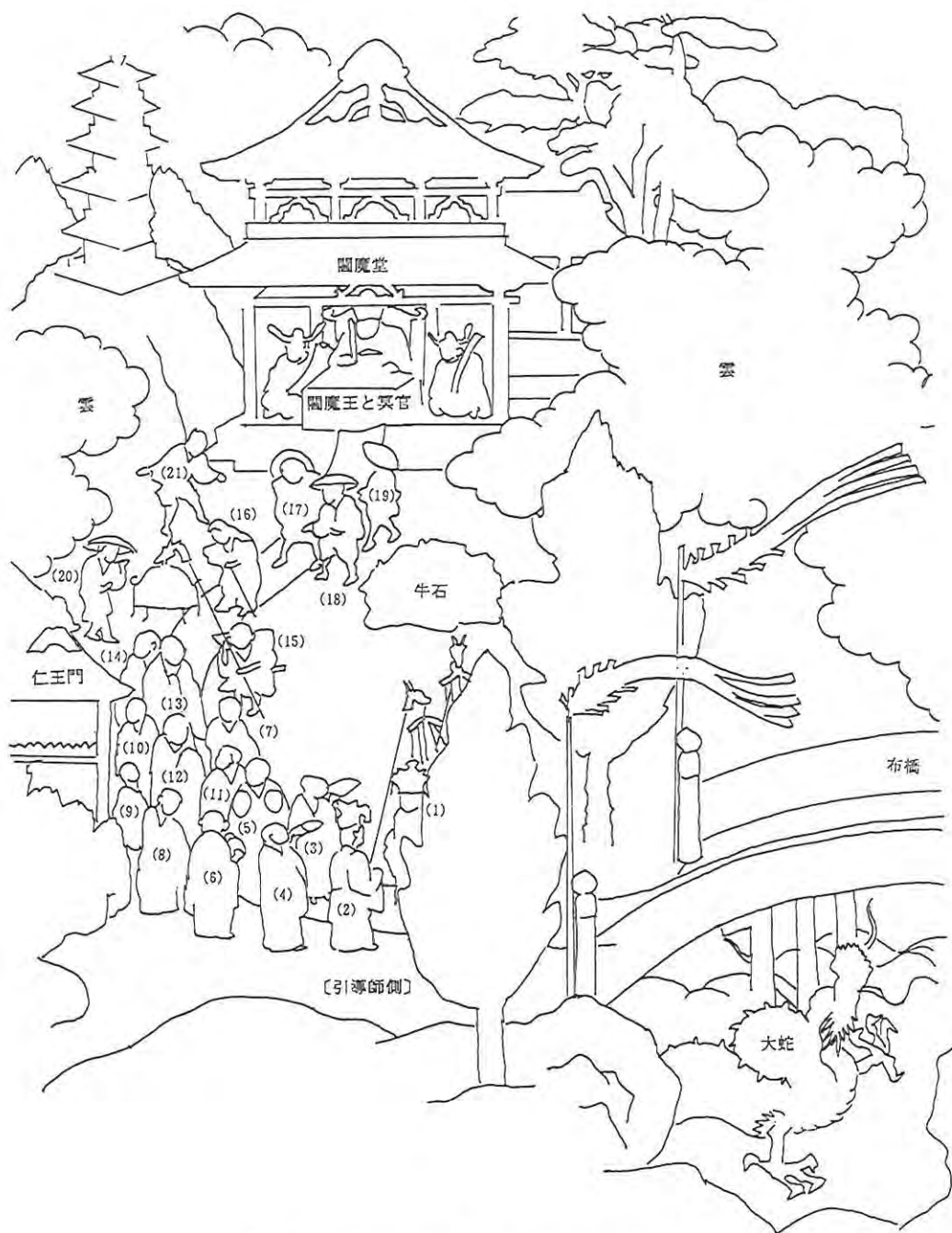
さて、この佐伯有頼の装束の図像の違いが、C類の諸本における模写関係を探る上で大きな意味を有する。岩鼻通明氏は「立山マンダラ作成年代考」<sup>5)</sup>で、佐伯有頼の服装によって諸本の作成時期の前後関係を類推し、各立山曼荼羅に描かれた有頼の服装を鎧兜の武者姿、烏帽子狩衣姿、衣冠・束帯姿の3つに分類し、概ね、時代を追うごとに、武者姿から狩衣姿、衣冠・束帯姿へと変化していくことを指摘されている。この論に基づいて武者姿の有頼が描かれた「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「筒井氏本」より、烏帽子狩衣姿の有頼が描かれた「善道坊本」の方が後の時期に制作された考え、さらにC類の諸本における模写関係を探る際、一番最後に模写されたと考えられる「善道坊本」を基点に、各本の模写関係を探っていくことが可能である。

### 3.3 布橋灌頂会の場面の構図や図像の比較検討

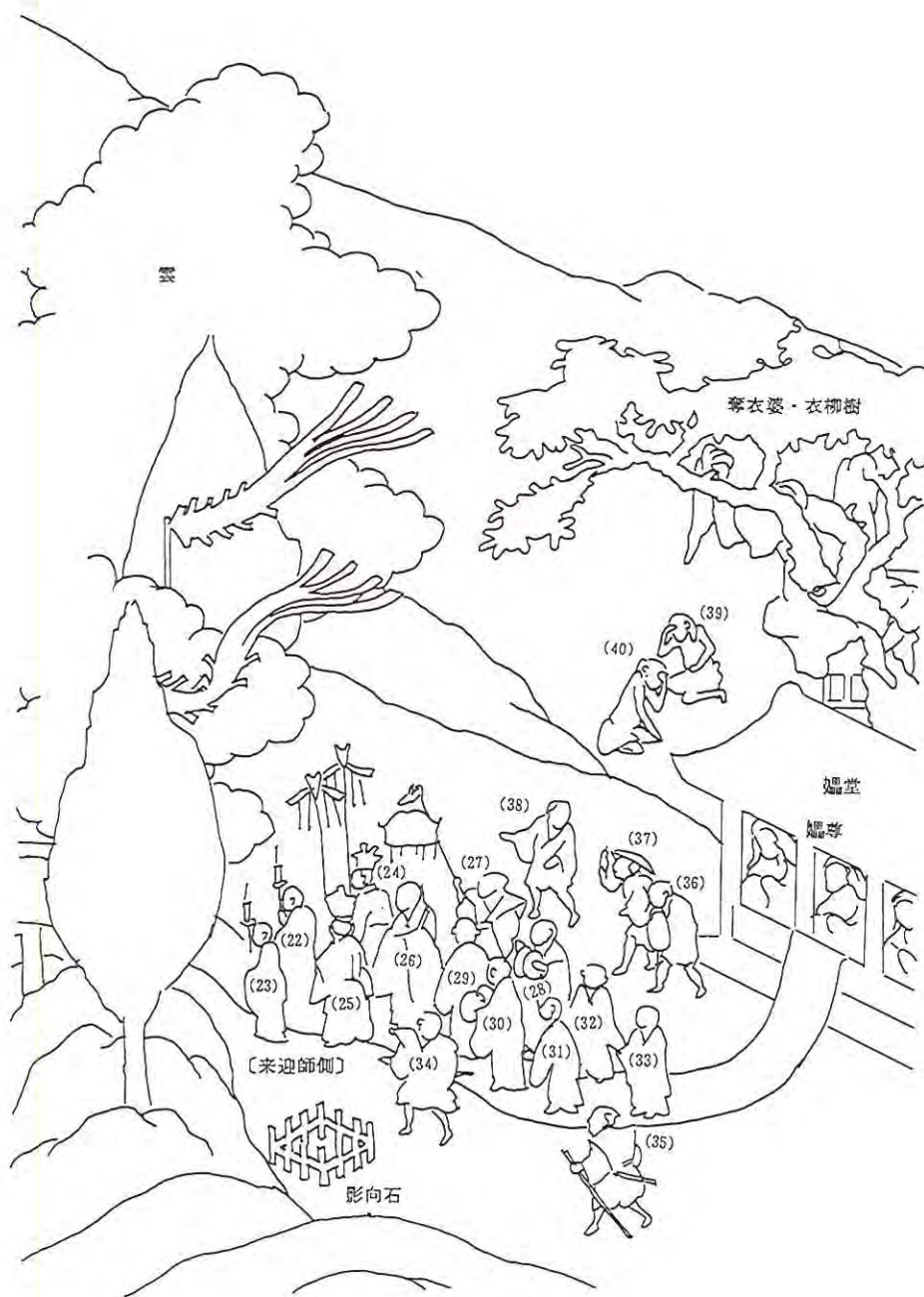
C類の曼荼羅諸本間の模写系譜を探るため、以下、第4図を参照しながら、特に布橋灌頂会の場面の構図や図像を詳細に比較・検討していきたい。

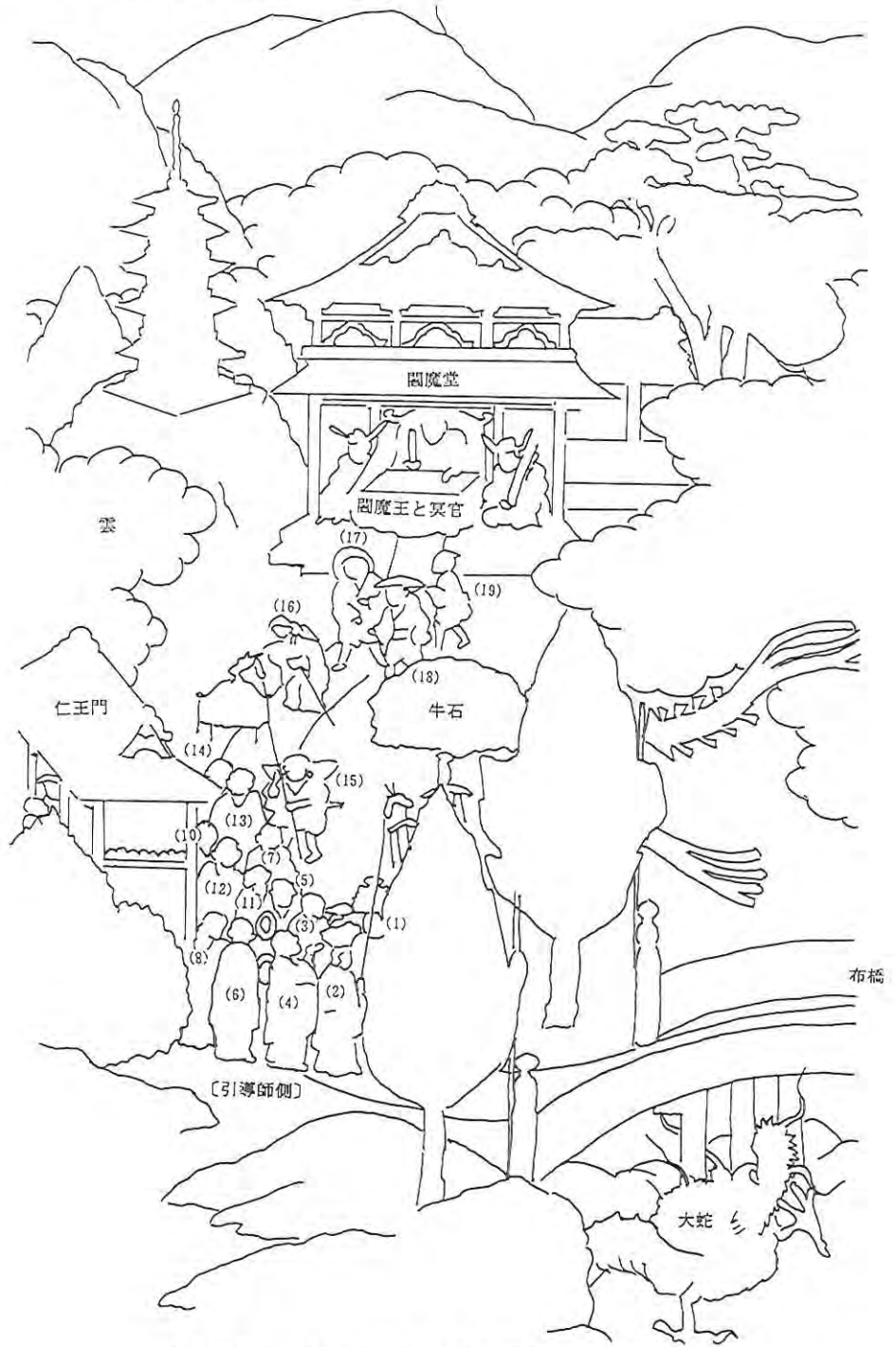
#### ア) 布橋灌頂会の参列者 —— 引導師側の職衆の人数・ポジション

参詣者を導く引導師側の職衆の図像が、最も多く的人数で描かれている「相真坊B本」で見えていくと、先頭からほぼ順番に幢幡持(1)・(2)が2名、法螺〔黒衣〕(3)・(4)が2名、鉞〔黒衣〕(5)・(6)が2名配置され、その他、黒衣の職衆(7)・(8)・(10)が小僧(9)も1名含め4名配置されている。さらに色衣の職衆が4名(11)・(12)・(13)・(14)、天蓋持1名(15)が配置されている。



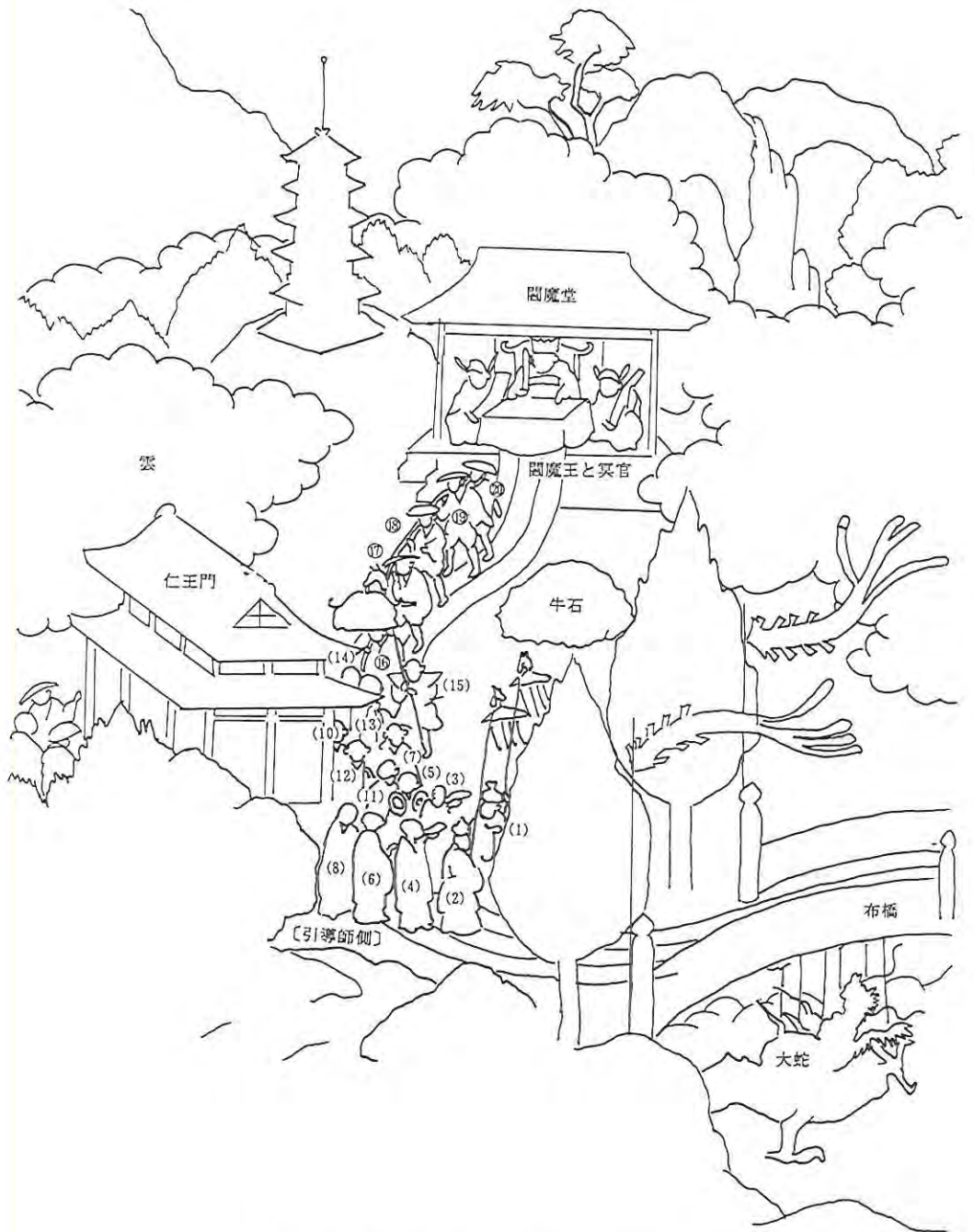
第4図-1 相真坊B本 (布橋涯頂会の場面)





第4図-2 大仙坊A本 (布橋灌頂会の場面)





第4図-3 善道坊本（布橋灌頂会の場面）





第4図-4 佐伯省次氏本（布橋灌頂会の場面）





さて、「相真坊B本」と「筒井氏本」の図像は、職衆のそれぞれの人物(1)～(15)の姿勢や持物、配置、色彩の面において、ほぼ共通している。しいて微妙な差異を指摘するとすれば、天蓋持(15)が「筒井氏本」では、列の中間ぐらゐに配置されている。「大仙坊A本」と「善道坊本」のその図像は、職衆のそれぞれの人物(1)～(8)、(10)～(15)の姿勢や持物、配置、色彩の面において、「相真坊B本」と「筒井氏本」のそれとほとんど共通している。ただ、白布の筵道と仁王門が接近し職衆の列に圧迫を与えているため、「大仙坊A本」と「善道坊本」では、引導師側の僧列は窮屈に描かれ、黒衣の小僧(9)が削除されている。

イ) 布橋灌頂会の参列者 —— 祭礼への参加者と結縁者の人数・ポジション

祭礼への参加者と結縁者の図像が、最も多く的人数で描かれている「相真坊B本」で見えていくと、まず、白布の筵道上には老婆(16)が1名配置されている。その後方に荷を背負い笠を被った人物(17)の他、笠を被った人物2名(18)・(19)が配置されている。さらに、白布の筵道の画面に向かって左脇に笠を被った人物1名(20)と、何も被らない人物1名(21)が配置されている。この布橋灌頂会の場面では、実際には多くの参詣者が祭礼に参加していたはずであるが、参列者は老婆(16)一人の図像にそれが集約されて描かれている。

さて、「相真坊B本」と「筒井氏本」の図像は、老婆(16)やその後方の3名の人物(17)・(18)・(19)、白布の筵道の画面に向かって左脇の2名の人物(20)・(21)の等の容姿や配置の面でほぼ共通している。ただ装束の色彩に若干違いが見られる。「大仙坊A本」のその図像については、人物(20)・(21)が削除されているが、あとの(16)～(19)の容姿・配置については「相真坊B本」・「筒井氏本」の図像と共通する。「善道坊本」では、白布の筵道上に5人の参詣者を配置し、「相真坊B本」・「筒井氏本」・「大仙坊A本」の図像とは全く異なっている。ちなみに、「善道坊本」のこの部分の図像は、参列者が善の綱を握っている等、葬送儀礼の色彩が強く、「佐伯省次氏本」のその図像と比較的似ている。

ウ) 布橋灌頂会の参列者 —— 来迎師側の職衆の人数・ポジション

来迎師の職衆の図像を「相真坊B本」で見えていくと、先頭からほぼ順番に蠟燭を持つ職衆〔黒衣〕(22)・(23)が2名、幢幡持(24)・(25)が2名、職衆阿闍梨〔色衣〕(26)が1名、天蓋持(27)が1名、法螺〔黒衣〕(29)が1名、鉞〔黒衣〕(28)・(30)が2名、その他黒衣の職衆(31)・(32)・(33)が3名、警固(34)・(35)が2名配置されている。

さて、「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「善道坊本」の図像は、蠟燭持〔黒衣〕(22)・(23)や幢幡持(24)・(25)、阿闍梨〔色衣〕(26)、天蓋持(27)、法螺〔黒衣〕(29)、鉞

〔黒衣〕(28)・(30)、その他の黒衣の職衆(31)・(32)・(33)等の容姿や持物、配置の面でほぼ共通している。「筒井氏本」は、蠟燭持が6名描かれており、他の曼荼羅と若干異なっているが、その他の部分の図像は、「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「善道坊本」のそれとほぼ共通している。

ところで、これらの職衆の他、各曼荼羅には白布の筵道脇に警固が2名(34)・(35)描かれているが、この配置に注目したい。「相真坊B本」と「筒井氏本」では、2人の警固(34)・(35)はお互いに視線を合わせ連絡をとり合っている。前方の警固(34)は半身になり、後方の警固(35)と、あたかも何かを話しているようである。

一方、「大仙坊A本」と「善道坊本」では、前方の警固(33)の配置と姿勢は先程と同様であるのに対し、後方の警固(35)は置換され、先程の姿勢のまま鉞等を持つ衆徒たちの最後尾脇に描かれている。それゆえ元は運動していた前方の警固(33)の動きと後方の警固(35)の動きが寸断され、その姿勢が意味をなさなくなり不自然さを感じさせている。いわば、「相真坊B本」と「筒井氏本」のその場面においては、図像の動きが祭礼の流れの中でむだなく合理的に表現されていたのに、「大仙坊A本」と「善道坊本」のその場面では、図像の位置を微妙に置換したため、ストーリーが若干くずれてしまったのである。

このように絵師によって置換の操作が行われた理由は、画面の大きさの変化にある。おそらく、最も完成された構図や図像を有する「相真坊B本」から、その情報をなるべく洩らさないようにして、「大仙坊A本」が模写制作されたと推測されるが、その際、「相真坊B本」が長方形の画面にゆったりと図像を描き込んでいるのに対し、「大仙坊A本」は正方形のやや小振りの画面に図像を描き込もうとしたため、その配置に物理的な無理が生じ、だからといって、警固役を削除するわけにもいかず、空いているスペースに置換したのである。その置換された図像が、そのまま模写されて「善道坊本」に描かれたと考えたい。

#### エ) 引導師側龕堂前の参詣者の人数・ポジション

「相真坊B本」には、龕堂の向かって左前方に3名の参詣者(36)～(38)が配置されている。「大仙坊A本」と「筒井氏本」には、若干装束が異なるものの、「相真坊B本」にみられるものと共通の容姿と配置で参詣者(36)・(37)が描かれているが、(38)の参詣者は削除されている。「善道坊本」では、3名の参詣者とも削除されている。布橋から龕堂までのスペースが「相真坊B本」や「筒井氏本」では、比較的大きく割かれていたのに、「大仙坊A本」と「善道坊本」では、布橋が長く描かれ、その分、布橋から龕堂までのスペース削減され、その影響で職衆や参詣者の図像に置換や削除といった操作を

加えられたのである。

オ) 嬬堂・嬬尊

「相真坊B本」と「筒井氏本」は嬬堂の外容の図像や、嬬堂内の3体の嬬尊の図像がほぼ共通している。一方、「大仙坊A本」と「善道坊本」も嬬堂の外容の図像や、嬬堂内の多数の嬬尊の図像がほぼ共通している。「相真坊B本」・「筒井氏本」に描かれた図像と「大仙坊A本」・「善道坊本」に描かれた図像とでは嬬尊の描き方にかなりの違いが見られ、「善道坊本」は「大仙坊A本」から模写された可能性を強く示唆している。

カ) 奪衣婆・衣柳樹とその下の人物・鬼

「大仙坊A本」と「善道坊本」には、嬬堂から少し離れた後方に衣柳樹と奪衣婆、女性の人物(39)・男性の人物(40)のほぼ共通の図像が配置されている。ただ「善道坊本」には、人物(39)・(40)の背後に鬼が付加されているところに若干の違いが見られる。「相真坊B本」と「筒井氏本」には、嬬堂の屋根の真上に衣柳樹と奪衣婆、その斜め下に女性の人物(39)・男性の人物(40)を配置している。「大仙坊A本」と「善道坊本」には、男女の人物が背中合わせて描かれているが、「相真坊B本」と「筒井氏本」には、向かい合わせて描かれ、配置が異なっている。「善道坊本」の図像は、「相真坊B本」や「筒井氏本」からではなく、「大仙坊A本」から模写されたと考えられる。

キ) 閻魔堂・閻魔王と冥官

「相真坊B本」と「大仙坊A本」の閻魔堂及びその中の閻魔王と冥官の図像は共通している。「筒井氏本」のその図像は、「相真坊B本」と「大仙坊A本」の図像を明らかに踏襲しており、横方向に拡張したものである。「善道坊本」のその図像については、閻魔王と冥官の図像は「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「筒井氏本」と共通しているが、閻魔堂の外容についてはどれとも一致しない。「筒井氏本」は「相真坊B本」・「大仙坊A本」から模写された可能性がある。「善道坊本」から「筒井氏本」は模写され得ないことを示唆している。

ク) 称名川と藤橋

「大仙坊A本」と「善道坊本」に描かれているが、「相真坊B本」と「筒井氏本」には描かれていない。「善道坊本」が「大仙坊A本」から模写されたことを示す。(キ)の項目と合わせて考えると、「筒井氏本」は「相真坊B本」の図像を踏襲していると考えられる。

ケ) 影向石

「相真坊B本」と「大仙坊A本」には影向石を囲む柵だけが描かれている。「善道坊本」には、「相真坊B本」や「大仙坊A本」に描かれたのと同様の柵が描かれ、その中

に影向石が付加されている。「筒井氏本」には柵も影向石も描かれていない。

コ) 牛石

「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「善道坊本」にはほぼ共通の図像で描かれている。「筒井氏本」には描かれていない。

サ) 布橋と蠡堂川の大蛇

「相真坊B本」・「大仙坊A本」・「善道坊本」にはほぼ共通の図像で描かれているが、「筒井氏本」の図像とは異なっている。

### 3.4 C類における模写関係

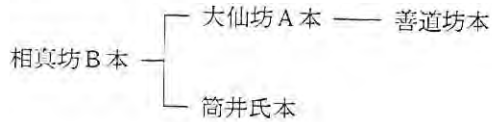
C類の4本の曼荼羅の中で最も早く完成したのは「相真坊B本」である。この「相真坊B本」は、製作者の芸術作品としては、あまりにも理路整然とし過ぎて面白味に欠けるが、構図のバランスや図像そのものの完成度、或いは図像が物語るストーリーの完成度などの点で、それ以前の芦峯寺系立山曼荼羅を集大成したピークをなす曼荼羅といえよう。

さて、この「相真坊B本」が制作された後、その図像をほとんどの場面に使用して「大仙坊A本」が制作された。ただ「相真坊B本」が長方形のゆったりしたスペースに描かれているのに対し、「大仙坊A本」は、その構図を極力崩すことなく、また図像を極力損ねることなく正方形のスペースに入れ込んだため、見た目にかなり窮屈で煩雑に見える。さらにそのため、ある図像は削除され、或いは図像の物語性が無視されている箇所も見うけられる。

同じ「相真坊B本」の構図や図像を随所に使用しながらも、筆致や彩色をかえながら全体的に異なる雰囲気醸した出している曼荼羅が「筒井氏本」である。この「筒井氏本」は「大仙坊A本」と共通する図像が多いが、「大仙坊A本」の構図や図像を使用したのではなく、「相真坊B本」の構図や図像を使用して制作されたものである。いわば「相真坊B本」が親で「大仙坊A本」とは兄弟といった関係である。

「大仙坊A本」が制作された後、その図像を随所に使用し「善道坊本」が制作された。ただ、開山伝説に関する佐伯有頼が熊に矢を射る場面や玉殿の窟の場面などでは、有頼が衣冠束帯の装束を着しており、「大仙坊A本」のそれとは異なり尊王思想の影響が強く見られる。また、二十五菩薩の来迎の図像や、布橋灌頂会の場面の女性の参列者の図像などにも異なりが見られる。

以上を系図に表現すると第5図のようになる。



第5図 C類における模写系譜図

### おわりに

以上本稿では、近世後期の芦峯寺系立山曼荼羅の制作方法について、曼荼羅によって程度の差こそあれ、過半数以上の曼荼羅が曼荼羅相互の模写関係によって成立していることを指摘した。そして、どうやらその際、同時に何本も同じ作品が模写制作されたのではなく、ある作品を参考にして部分的に模写し新たな1本の作品ができあがり、後にその作品を参考にして部分的に模写し、別の1本の作品ができあがるといった具合に、1本ずつ順次に制作されていったようである。

ところで、今回の指摘は芦峯寺系立山曼荼羅の全てに該当するわけではなく、あくまでも幾つかの曼荼羅にだけ限定していえることである。また、系譜図(第2図)については現在確認しうる芦峯寺系立山曼荼羅を対象とし、その資料群の枠内で類推しながら作成したものであり、かならずしも正確とはいえない。今後新たに芦峯寺系立山曼荼羅が発見される可能性も高く、その内容の如何によっては本稿の訂正も必要となるであろう。こうした点を考慮し、今回試論として発表した。

### 謝 辞

本稿に掲載した第1図・第4図の原図製作にあたっては、佐伯明美氏の協力を得た。ここに記して深く感謝の意を表する。

註

- 1) 「納経一件扣 上ル扣 (文化8年)」(『芦峯寺雄山神社蔵文書』)には「一立山之絵  
図まん多ら与号、披露仕諸人參詣為致候処へ、岩峯寺衆徒年々利ふちんニ右絵図半記  
取候へ共、彼是申候得バ争論ニ相成故、御役所様へ御難題ヲ懸、且拙僧共困窮之処故、  
御断不申上候。」とあり、当時、芦峯寺衆徒が立山曼荼羅を「曼荼羅」として認識し、  
通常「立山之絵図まん多ら」と呼称して諸人の參詣を誘うため披露していたことが窺  
われる。ちなみに古文書史料を管見する限り、この史料に記された「立山之絵図まん  
多ら」の用語が、立山曼荼羅を指すことが確実な用語の初見である。この記載以後は、  
文化末期から天保4年頃までの芦峯・岩峯両寺間の立山の宗教的権利をめぐる争いに  
ついて記した芦峯寺文書に、「御絵伝」や「御繪有頼之由来」、「有頼由来立山御絵」、  
「開山之行状之御絵伝」など、立山曼荼羅を指す用語が比較的多く見られる。例えば、  
文政元年の「納経一卷等記録」(『越中立山古記録1』所収、頁104～頁105)に収めら  
れた芦峯寺から加賀藩寺社奉行所への書付に「一 御繪 有頼之由来」と見え、さら  
にその内容について、「右、有頼之由来ヲ絵伝ニ仕、有頼一代并布施城主ヨリ於立山  
不思議奇瑞之事共を委細絵図ニ相認申物故、於立山之事共三幅之致絵伝ニ、往古ヨリ  
他国江籠越致教化申故、自然と他国ヨリ參詣之諸人も御座候。」と説明されている。
- 2) 岩鼻通明「立山マンドラ作成年代考」(『山岳修験・2号』、1986、山岳修験学会)  
福江充「布橋灌頂会の変遷について 文政期から天保期を中心として」(『富山史  
壇・113号』、1994、越中史壇会) この論文の中で、筆者は、江戸時代に立山山麓芦  
峯寺で行われた「布橋灌頂会」の儀式内容の時期的変化を指摘し、さらに、芦峯寺系  
立山曼荼羅における布橋灌頂会の図様の描き方から、「坪井龍童氏本」の補修・補筆  
以前の図を除き、その他の芦峯寺系立山曼荼羅は全て文政末期以降の制作であると考  
察した。
- 3) 林雅彦『増補日本の絵解き-資料と研究-』(1984、三弥井書店、頁224～頁225)
- 4) 製作者が行う操作の内容とその呼称については、黒田日出男「絵巻物の分析とその  
方法」(『週刊朝日百科日本の歴史別冊 歴史の読み方1、絵画史料の読み方』所収、  
1987、朝日新聞社)を参考にした。
- 5) 註2) 岩鼻通明「立山マンドラ作成年代考」を参照のこと。